



福島原発事故から10年、科学技術分野のメディアへのメッセージ

安 斎 育 郎

1972年に開催された日本学術会議の原子力問題のシンポジウムで、私は原子力開発のあり方について「6項目の点検基準」を提起した。それらは、①開発の自主性が保たれているか、②経済性か安全性か、③内発的地域開発計画を阻害しないか、④軍事利用への歯止めは十分か、⑤労働者と住民の安全を確保するに足る実証性が確保されているか、⑥民主的原子力行政が保障されているか、の6点だ。

筆者は東大工学部の原子力工学科第1期生で、原発を支える高級技術者になることを期待されていたが、1973年以来、福島の浜通りの住民たちと原発反対の活動に取り組み、「反国家的イデオロギー」の誹りを受けながらアカデミック・ハラスメントを体験した。だから、福島原発事故に直接責任を負うべき立場にないことは確かだが、原発を次々と受け入れた福島県民の間にもっと強靱な批判力・抵抗力を築くために力を尽くせなかったかと、強い悔恨の情に苛まれた。その後「福島プロジェクト」を立ち上げ、80回に及ぶ調査・相談・学習活動に取り組んだ動機は、そこにある。被災者をサポートし、この人類史的事故の教訓を発信するために力を尽くそうと考え、思いを共有する友人たちとともに福島に通い詰めた。しかし、こうした「虫の目」ともいうべき活動だけでは国家の大戦略や歴史の潮流は見えないので、学術会議問題で言われた「俯瞰的・総合的」に時代を見る「鳥の目」が不可欠であるとも確信している。

筆者はともに原発批判に取り組んだ檜葉町の早川篤雄・宝鏡寺住職と3月11日に「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言館」を開設し、その展示の中に、「日本に原発が54基も増えた背景」として、①「平和のための原子力」の美名の下でのアメリカの対日エネルギー戦略、②対米従属的な原子力政策に堕した日本政府、③政府と結託して原発を推進した電力資本、④実証的な安全性を軽視して原発を認可した官僚機構、⑤それに従属・協力して「安全性」にお墨付きを与えた「御用学者」、⑥そのようにして作られた「安全神話」を垂れ流したマスコミ、⑦交付金欲しさに原発誘致にのめりこんだ地方自治体、⑧地縁・血縁のしがらみの中で原発推進組織に巻き込まれた一部の人々、⑨政府に対する独自のチェック機能を果たせなかった司法の実態、を挙げ、「結果として『国民総動員・原発推進翼賛体制』が築かれ、専門家も相互批判力のない独善的な原発推進体制に巻き込まれて破局に向かった」と書いた。⑥は単純すぎる総括に感じられようが、マスコミが「ブレーキ」であるよりは「エンジン」として機能した事実は、それなりに重く感じる。

若い記者の取材は、時として「取材」というより「講義」になる。記者の受け持つ領域は多面的だが、旺盛な好奇心と綿密な現場取材と持続的な学習を軸に、「虫の目」と「鳥の目」を併せ持つ告発者になって欲しいと願う。
(安斎科学・平和事務所所長)

CONTENTS

巻頭言	1
総会報告	2
ニュース	4
科学ジャーナリスト賞2021／ZOOM井戸端会議／ 3事故調のインタビュー映像／J-STAGE登録	

例会報告(2月)	7
例会報告(3月)	8
例会報告(4月)	9
オピニオン／WEB編集長から	10
事務局だより	12

コロナ下でも活動多彩に

日本科学技術ジャーナリスト会議（JASTJ）は3回目の新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が続く5月18日、2021年度総会をオンライン方式で開催した。当日に参加した正会員は42名、議長委任37名と事前に議決権行使した12名を合わせて91名となり、定足数（会員数198名の5分の1）を上回って総会は成立した。議決権を持たない賛助会員が5名参加した。20年度活動報告と決算報告、会則改正、21年度の事業計画と予算、新理事（倉澤治雄氏、三井誠氏）承認の議案について会長と各委員長から説明。質疑応答の後、いずれの議案も賛成多数で承認された。参加者から理事会での月例会講師の決め方、メーリングリストの運用などについて意見が出された。会則の変更によって会員が直接、総会への議題・議案の提案ができることになった。総会後に開かれた理事会で、室山哲也会長の留任、滝順一事務局長の就任など、各理事の担当を決めた。

（総務委員長 高橋真理子）

■総務・財務

20年度は新型コロナウイルスの影響が継続していたため、委員会活動も対面で行えなかったが、オンラインによる交流により月例会、J塾などを実施、遠隔地からの参加も可能となって活性化した面もあった。賛助会員数は、増減はあるが昨年同様16社であった。個人会員は197名と前年より8名増となった。決算では4年ぶりにプラス収支となったが、活動が対面で実現できなかったための経費減が主因であり、21年度は下期から従来通りの活動に戻ると予想し収支はゼロとした。決算、予算は、次頁の通り。

（前事務局長 山本威一郎）

■企画委員会

20年度は月例会、塾ともネット会議形式（ZOOM）を活用し、予定通り実施した。

月例会では新型コロナ感染症をテーマに昨年4月（武藤香織氏）、5月（清水健氏ほか）、7月（國島広之氏）、11月（宮坂昌之氏）、今年1月（大隅典子氏）と、多様な視点から考えた。5月には西浦博氏をゲストに緊急勉強会も実施した。また東日本大震災から10年を迎えた3月は津波防災の専門家の今村文彦氏を迎えた。7月、11月は実地、ZOOMを併用した。

19期となったJASTJ塾は、昨年9月3日の初回から今年2月4日の修了式まですべてZOOMで実施。

全国から32人が参加した。基本講座である、企画の立て方、文章の書き方、映像の作り方などのほか、WEBジャーナリズムやフリーランスの活躍紹介などの講座も盛り込んだ。担当者の負担は大きかったが塾生の評価、満足度は高かった。

（委員長 内城喜貴）

■科学ジャーナリスト賞委員会

新型コロナウイルス感染症対策の緊急事態宣言のため、J賞2020の最終選考会の開催は例年より遅れた。20年6月13日にハイブリッド方式によって日本記者クラブの会議室で開き、特別賞1作品を含む4作品を選んだ。贈呈式は開かず記念の盾を受賞者に郵送した。

20年7月から募集を開始したJ賞2021は21年1月末までに74作品の応募があった。3月6日の1次選考で11作品に絞り4月10日の最終選考（ハイブリッド方式）で3作品を選んだ。贈呈式は7月末に開催予定。

サイエンス・ブック・カフェを3回開催した。

（委員長 滝順一）

■編集委員会

20年度は会報とホームページに加え、Facebook、twitter、note「COVID-19科学ジャーナリストのための情報整理」「JASTJみんなの広場 学術と社会の関わりを考える」を開設した。会報は96号より高木勲生編集長から井上能行編集長に引き継がれ、科学技術振興機構の論文データベースJ-STAGEへの登録作業も開始した。ホームページはバナーを設けるなど改良した。21年度も上記のツールを使い、時宜を得た情報発信によりJASTJの発信力を強化する。

（委員長 瀧澤美奈子）

■国際委員会

COVID-19の影響で、2021年開催予定だった科学ジャーナリスト世界会議（WCSJ）は2022年3月、コロンビアのメデジン市での開催となった。世界科学ジャーナリスト連盟（WFSJ）では、ネット発信を強化しており、JASTJからも「科学ジャーナリスト塾」が初めてWeb開催となったが盛況だったことを報告、世界連盟のTwitterに掲載された。

WFSJはWHO（世界保健機関）、各国のサイエンス・メディア・センターなどと連携、COVID-19関連の情報、ウェブ討論などを展開しており、JASTJ会員に積極的に知らせる予定。（委員長 小出重幸）

2020年度 決算報告（2021年3月末：単位は円）

収入		支出	
前年度繰越金	3,686,657	費目	摘要
会費収入		事務局職員給与	626,280
正会員（197名）	2,046,000	事務所家賃	1,073,004
賛助会員（17社20口）	2,340,000	会議費	（総会、理事会等会議室借用）47,888
		交際費	（懇親会）2,160
会費小計	4,386,000	備品・消耗品費	（文具、郵送料、OA機器等）221,744
その他の収入		通信費	（電話、メール管理料）139,964
参加費（月例会、懇親会等）	14,500	支払手数料	（振込手数料、ビジネスWEB）68,750
ジャーナリスト塾会費	352,000	源泉徴収税	（講師料など）44,573
寄付	67,864	事務局総務委員会予備費	（会計作業費、総務関係費、理事交通費など）264,147
雑収入	6,253	雑費	10,901
利子	19	管理関係小計	2,499,411
		企画委員会（月例会、総会など）	（会場費、講師代等）322,817
		企画委員会（ジャーナリスト塾）	（会場費、講師代等）230,079
		編集委員会	（4回会報発行分、HP運営費）943,086
		国際活動委員会	（世界連盟会費等）35,844
		科学ジャーナリスト賞委員会	（会場費、会議室借用、選考謝礼、書籍、郵送等）409,002
		委員会予備費	（特別プロジェクト費）115,599
その他小計	440,636	委員会小計	2,056,427
当年度収入合計	4,826,636	当年度支出合計	4,555,838
		収支	270,798
		次年度繰越金	3,957,455

2021年度 予算計画（単位は円）

収入		支出	
前年度繰越金	3,957,455	費目	摘要
会費収入		事務局職員給与	650,000
正会員（198名）	2,046,000	事務所家賃	1,070,000
賛助会員（17社21口）	2,520,000	会議費	（総会、理事会等会議室借用）60,000
		交際費	（懇親会）10,000
会費小計	4,566,000	備品・消耗品費	（文具、郵送料、OA機器等）160,000
その他の収入		通信費	（電話、メール管理料）140,000
参加費（月例会、懇親会等）	60,000	支払手数料	（振込手数料、ビジネスWEB）70,000
ジャーナリスト塾会費	-	源泉徴収税	（講師料など）50,000
寄付	60,000	事務局総務委員会予備費	（会計作業費、総務関係費、理事交通費など）260,000
雑収入	4,000	雑費	10,000
利子	20	管理関係小計	2,480,000
		企画委員会（月例会）	（会場費、講師代など）350,000
		企画委員会（ジャーナリスト塾）	（会場費、講師代など）-
		編集委員会	（4回会報発行分、HP運営費）944,000
		国際委員会	（世界連盟会費等）300,000
		科学ジャーナリスト賞委員会	（会場費、会議室借用、選考謝礼、書籍、郵送等）500,000
		委員会予備費	各委員会予備費、特別プロジェクト費120,000
その他小計	124,000	委員会小計	2,210,000
当年度収入合計	4,690,000	当年度支出合計	4,690,000
		収支	-
		次年度繰越金	3,957,455

2021年度の理事及び監事、顧問と主な担当

会 長	室山 哲也		佐藤 年緒	総務
副会長	内城 喜貴	企画委員長、編集広報	高木 鞠生	編集広報
	柏野 裕美	編集広報委員長（ICT担当）、企画、国際	都丸 亜希子	編集広報、J賞、企画
	高橋 真理子	総務委員長、国際	中道 徹	総務、J賞
	瀧澤 美奈子	編集広報委員長（統括）、web編集長、企画	西野 博喜	編集広報
事務局長	滝 順一（新）	J賞兼務、財務	林 勝彦	J賞
会報編集長	井上 能行	編集広報	藤田 貢崇	総務（システム）
理 事	縣 秀彦	企画	三井 誠（新）	J賞
	飯島 裕一	J賞	三輪 佳子	編集広報、国際、総務、企画
	大池 淳一	J賞	村松 秀	J賞
	大江 秀房	編集広報	元村 有希子	J賞委員長（新）
	鴨志田 公男	編集広報、J賞	山本 威一郎	総務（経理・財務）
	倉澤 治雄（新）	J賞、企画	監 事	北村 行孝、佐藤 征夫
	小出 重幸	国際委員長、編集広報、企画	顧 問	武部 俊一、牧野 賢治
	佐々 義子	J賞		

注）理事の名前は50音順で、（新）は新任。各理事が所属する委員会には、企画、編集・広報、科学ジャーナリスト賞（J賞）、国際、総務の5委員会体制にした。

科学ジャーナリスト賞2021

科学ジャーナリスト賞（J賞）2021の最終選考会を4月10日にプレスセンタービル8階会議室で開いた。選考委員のうち2人（大隅典子東北大学副学長、大池淳一JASTJ理事）がリモート参加するハイブリッド形式の会合となった。受賞作は別表の通り。

最終選考に残った11作品のうち選考委員が事前につけた評価点の平均値で上位から3作品が選ばれた。振り返れば順当な結果とも取れるが、選考は難



ハイブリッド形式で開かれた最終選考会
（撮影 筆者）

航し、事務方として「3作品に絞り込めないのでは」と思う瞬間もあった。

NHK「デジタルハンター」では海外の同趣旨の先行番組の存在が議論

になった。また東日本大震災から10年のタイミングで関連する別の映像作品を推す意見もあった。書籍「西浦博の挑戦」に対しては、新型コロナ対策初期の生々しい記録だと高く評価する意見がある一方で、西浦氏の予測を評価するのは時期尚早だとの慎重論も出た。新聞連載「サクラエビ異変」への高い評価はほぼ一致していた。もう一つの新聞候補作への評価も高くどちらを選ぶかが議論になった。

長時間に及ぶ選考に参加していただいた選考委員の皆さまに改めて感謝申し上げたい。

受賞者の言葉

新聞連載「サクラエビ異変」

ジャーナリズムとアカデミズムの壁を取り払う

静岡新聞社編集局清水支局長 坂本 昌信

大きな賞をいただき、取材班一同、感謝申し上げます。静岡のソウルフードであるサクラエビは、近年、深刻な不漁が続いており、かつての「朝食のお供」は高級品になり、県民の食卓に上がらなくなってしまいました。こうした事態に直面し、取材班ではこれまで、東京大や海洋研究開発機構（JAMSTEC）などの科学者有志でつくる私的研究会「サクラエビ再生のための専門家による研究会」（座長・鈴木款静岡大特任教授）と連携させていただき、黒潮大蛇行や地球温暖化、漁業者の取り過ぎ（乱獲）、主産卵場に注ぐ富士川の河川環境など原因追究のための幅広い議論を記事化してきました。ジャーナリズムとアカデミズムの壁を取り払ってくださった鈴木座長はじめ諸先生方にこの場を借りて厚くお礼を申し上げます。ジャーナリストができること、サイエンティストにしかできないこと。協力して前に進めることができること。今後も挑戦をしていきたいと思います。

環境問題における世代間倫理

静岡新聞社編集局文化生活部 遠藤 竜哉

「サクラエビ異変」取材班は、ほぼ全員が文系出

科学ジャーナリスト賞2021受賞作品

静岡新聞社清水支局長 坂本 昌信、同社編集局文化生活部記者 遠藤 竜哉

●新聞連載「サクラエビ異変」



坂本 昌信さん



遠藤 竜哉さん

京都大学大学院医学系研究科教授 西浦 博、作家 川端 裕人

●「理論疫学者・西浦博の挑戦 新型コロナからいのちを守れ！」



西浦 博さん



川端 裕人さん

日本放送協会（NHK）国際放送局チーフ・プロデューサー 高木 徹
NHKグローバルメディアサービス国際番組部ディレクター 高田 里佳子
株式会社ウイング ディレクター 樋爪 かおり

●BS1スペシャル「デジタルハンター～謎のネット調査集団を追う」



高木 徹さん



高田 里佳子さん



樋爪 かおりさん

選考委員（敬称略） 【有識者委員】 相澤益男、浅島誠、大隅典子、白川英樹、村上陽一郎
【JASTJ委員】 大池淳一、佐々義子、滝田恭子、林勝彦、元村有希子（委員長）

身の記者です。いわゆるサイエンスの知識を豊富に持ち合わせているわけではありません。ただ、科学に愛着を抱き、また、哲学を愛好しながら、日々の取材活動に取り組んで来ました。21世紀最大の課題ともいわれる環境問題と向き合う中、われわれはどう生きるべきかを真剣に考えてきました。

哲学と科学は同じ根っこを持つと言われます。その目的は、よりよく生きることだと考えます。環境問題で言えば、後継世代にツケを回さない世代間倫理であり、すなわち、現存世代の責任にはかなりません。自分の頭で考える（think by myself）ことは案外難しいものです。足元の駿河湾や富士川で起きていることをよく観察し、人の話をよく聞き、どう行動すべきか突き詰め、自分たちなりに科学者の協力を得て調べた結果を「科学報道」と呼んでいただけなのであれば、これ以上の喜びはありません。

理論疫学者・西浦博の挑戦 新型コロナからいのちを守れ！

知子さん、子どもたち、ありがとう

京都大学大学院医学研究科教授 西浦 博

2020年2月、単なるマニアック研究者である私の様々なことが一気に世にさらされました。自身の専門性を試される時ですので、不十分ながら精一杯に仕事をしました。厚労大臣や医務技監らと固唾を飲んで流行データを眺め、大先輩の尾身先生らを相手に怒鳴り合いをしながら対策基盤を構築してきました。

6月、短期的ではありますが、築き上げた自信が他者の評価を通じて崩れかけました。SNSや経済界からの激しい非難。大規模流行を予防したことの副次的被害に「謝罪しろ」「42万、死ななかつたじゃないか」「死ね」との声。フィクションならどれだけ幸せだったでしょう。

まだまだ流行と自身の役割が続くことは明白でした。自身が対面した事実を記録に残して国民に伝え、この流行対策の困難を知ってもらえるよう、聞き書きでの執筆活動をしました。自身の苦悩や専門的見地から、今後の見通しも含めて記述し、この国の危機管理を良き方向に導くために必要なことがわかるよう構成しました。

読みやすさと理解にかけては、共著者の川端裕人さんの実力が見事に染み出ました。コラム挿入や時間の並べ方など、絶妙に読者に届く本と一緒に仕上げさせてもらいました。

ここに至る仕事と強さを維持できたのは家族のお

かげです。東京へ届いた子どもたちからの手紙は、本当に嬉しいものでした。洗濯した服を何度も届けてくれた妻は、1年間、自身も勤務しながら3人の子どもを育ててくれました。彼女の経歴さえ世にさらされ、何かと言われることもあった中、ひろしパパの信じるものに付き合ってくれてありがとう。ちゃんと評価されましたよ。家族と一緒にもらった賞だと思います。

BS1スペシャル「デジタルハンター〜謎のネット調査集団を追う」

“善良なオタク”とオールドメディアの共同戦線

NHK国際放送局チーフ・プロデューサー 高木 徹

受賞させていただいた番組は「世界の”善良なオタク”がネットワークでつながり、デジタル空間上にある画像・映像・情報から必要なものを見つけて分析し、世界の大事件の真相を解明する新しい調査報道」の実態を追ったものです。主な取材対象であるデジタル調査集団「ベリングキャット」は、国際的にはすでに知られた存在で、その意味ではスクープ的な番組ではありません。ただ、制作者の視点として伝えたかったのは、彼らはその新しい手法と人材を、ニューヨークタイムズやBBCなどオールドメディアの代表格に送り込んで協業することで、その力を最大限に発揮しているという事実です。伝統的な国際メディアの「信頼性」「巨大な国際発信力」「地上取材力」は大きく、それとこの新しいデジタル調査手法「オープンソース・インヴェスティゲーション」が組み合わせさって始めて、世界を動かす報道ができるのです。このことを「ベリングキャット」の創設者や、メディア側もよくわかっています。

翻って日本では、「ジャーナリズムとインターネット」といったテーマが語られるとき、「新」対「旧」の対立的な捉え方、たとえば、「すでにインターネットはテレビを越えた」的な言い方がされがちだと思います。しかし実際はそうではなく、新旧のメディアはむしろ合流するものだ、ということはこの番組では証明していると思います。

最後に番組の成り立ちについて、受賞作は日本語の番組ですが、同じ内容の英語版「Digital Detectives」が先に制作され、NHKの国際放送「NHKワールドJAPAN」で放送・配信されました。私たちの番組作りでは、現在こうした形で国内放送と国際放送の両方を対象とすることが多くなっています。これからも、日本のみならず世界への発信も心がけていきたいと思っています。

ZOOM井戸端会議で「あの時私は～ 3・11東日本大震災の教訓～」 決して忘れず、語り継ぐ大切さを確認

東日本大震災の「あの日」から3月11日で10年の月日が流れた。だが、2万人近くの犠牲者の何倍も、何十倍もの数になる遺族や友人らは「10年は節目でも何でもない」と言う。3月13日のZOOM井戸端会議では、当時、東京電力福島第1原発事故を精力的に報じた元日本テレビ解説主幹でジャーナリストの倉澤治雄さんと、共同通信社の現地報道責任者だった私の2人が、緊迫した日々が続いた当時を振り返った。そして、「あの悲惨さ」「あの恐怖」を決して忘れず、語り継ぐことの大切さを改めて確認した。



大震災翌日の午後3時36分に1号機が水素爆発した恐怖の瞬間を、福島中央テレビのカメラが捉えていた。倉澤さんは、関係者に戸惑いがあったために貴重な映像が全国放映されるまで時間がかかった経緯などを説明。当時の官邸は、その映像で

初めて危機的状況を知ったというリスク管理の甘さなどについて語った。私は福島・浜通りの実家が津波に流されて従兄弟を失ったという個人的な喪失感も吐露しながら、被災者だけでなく、「それぞれの3・11」を経験した多くの人々が「あの日」を忘れずに、伝え続けることの大切さを訴えた。



2枚とも「宮城県名取市閑上地区の慰霊碑」
(2017年当時、筆者撮影)

2人の話の後の意見交換は時間が足りなくなったが、やり取りは福島の事故が今でも、いかに深刻なものかを再確認する場となった。事故現場の現状は今でも悲惨で、原因究明も不徹底だ。巨大津波に襲われた被災地には新たな防潮堤や復興住宅が建ったが、復興は道半ばだ。無数の遺体が並んだ安置所の慟哭（どうく）の現場など修羅場の残像は少なからず、トラウマになっている。だが、それもエネルギーに、科学記者の前に一人の人間として何ができるかを考え続けた。

(理事・副会長 内城喜貴)

3事故調のインタビュー映像 英語版をHPに掲載

JASTJ有志による東電福島第一原発事故再検証委員会（代表 林勝彦理事）は、政府・国会・民間の3事故調の元委員長にインタビューした記録映像の英語版を作成し、JASTJのホームページ（HP）で見られるようにした。原発事故の過ちを二度と繰り返さないよう失敗の原因や教訓を広く海外にも伝える。

インタビューは、3基の原発がほぼ同時に、メルトスルー・爆発した深刻な事故の原因や日本の対応などについて、事故7年後の2017年に3事故調の元委員長や責任者の畑村洋太郎氏、黒川清氏、船橋洋一氏の3人に聞いた。日本語版はすでに記事と映像をHPに掲載している。

今回の英語版制作は、海外にも発信すべきだとする

西野博喜理事の主導で始まった。インタビューの内容を簡潔な英語にしてテロップを付ける作業は再検証委員会の誰も経験したことがない作業だったが、西野理事が新しい編集機を購入するなどして、ようやく完成にこぎつけた。



3事故調 畑村洋太郎さんのインタビュー映像

英語版の制作には、①インタビュー内容の素訳②台詞を字幕の単位に区切る改訳③各画面の限定時間内に収めるための要約④テロップ入れなどの複雑な作業が欠かせない。これらの作業はNHKに専門部局があるほどのスキルが必要だが、西野理事が最後までディレクターとしてやり遂げた。

(理事 林勝彦、高木鞠生)

会報『JASTJ News』が 電子ジャーナルに

冊子で発行している会報『JASTJ News』は、本誌No.99号より科学技術情報発信・流通総合システム（J-STAGE）から電子ジャーナルとしても公開することになりました。J-STAGEは電子ジャーナルのオンラインプラットフォームでJST（日本科学技術振興機

構）が運営しています。J-STAGEでは多くの学協会や研究機関から発行されている科学技術刊行物が公開されています。

電子ジャーナルの仲間入りをしたことで、『JASTJ News』は記事ごとに検索ができるなど、冊子で読むのとは違った利用が可能になります。公開日やURLなどの詳細はあらためてJASTJのホームページでお知らせします。お楽しみに。（前理事 早野富美）

どう実現？カーボンニュートラル

高村ゆかり・東京大学未来ビジョン研究センター教授に聞く

二酸化炭素の大気中への過剰な放出は、地球温暖化とそれに伴う気候変動を引き起こす主な原因である。世界の多くの国々が数値目標を設定する中、日本でも菅内閣が温室効果ガス排出「2050年に実質ゼロ」を打ち出した。どのようにすればこの目標を達成することが可能なのか？ 日本学術会議の会員であり、国際環境条約に関わる法的問題、気候変動とエネルギーに関する法政策などを研究対象とする高村ゆかり・東京大学未来ビジョン研究センター教授に話をうかがった。

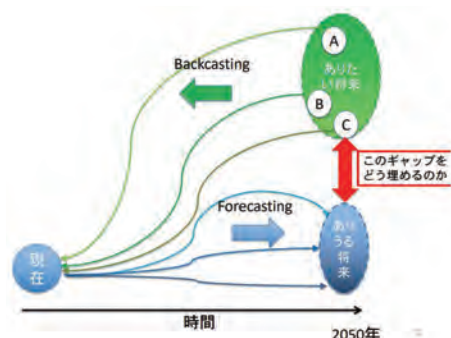
異常気象を引き起こす気候変動

講演は、カーボンニュートラルがなぜ必要かを考えるために、気候変動が引き起こす異常気象と災害についての話から始まった。日本では気候変動による災害での経済損失が、世界的にみても大きい傾向にあるという。災害は起こってしまったから対処するよりも、起きる前に地球の気温を下げて災害を未然に防ぐ方が、コストが低い。気温の上昇が1.5度と2度では、引き起こされる現象が全く異なる。だから災害を抑えるためにも、脱炭素化を実現し、気候変動を抑制する必要がある。今は特に若者を中心に「科学に基づく健全な危機感」が高まってきているという。

ビジョンとしての2050年カーボンニュートラル

高村さんは、2050年カーボンニュートラル実現の可能性について「今の私たちの社会の延長にはない」と述べた。つまり「2050年カーボンニュートラル」は目標というよりもビジョンであり、ありたい未来

社会の像を示す意味があるという。このビジョンを掲げることで、課題とイノベーションを皆で考えることが狙

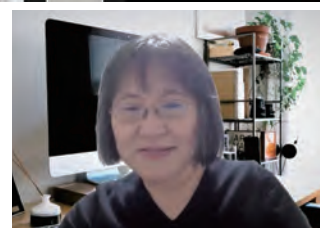


今の延長線にある「ありうる将来」と目標である「ありたい将来」のギャップは大きいことを示す図



ZOOMでの例会に出席した多くの参加者

いらしい。本気でこれを実現するつもりであれば、これまでの社会のあり方の変革とイノベーションが必要であるという。



高村ゆかりさん

カーボンニュートラルに向けた前向きな材料があることも紹介された。2015年予想よりも、現在の二酸化炭素排出量は減っている。再生エネルギーの技術面では、この10年で大変革が起こっており、発電のコストは新設ならば再生エネルギーの方が安い時代になってきている。この再生エネルギーの低コスト化は、これからもなお続く見通しだという。また多くの投資もクリーンエネルギーに向かっていることが紹介された。一方、再生エネルギーのコストが下がりすぎて、新たな再生エネルギーの発電施設を建設できないという別の問題も生じるといわれている。

日本における科学支援の課題

高村さんは質問への回答の中で、日本の科学技術支援の課題についても語った。現在の支援は「近い未来に実現の想定される課題」にのみ割り振られているが、このようなシステムでは、2050年カーボンニュートラルを実現することができるようなイノベーションを引き起こすことは難しいという。

「科学に基づく健全な危機感」を持ちつつ、今の私たちの生活の延長線上にはない「2050年カーボンニュートラル」というビジョンに向けて日本が進んでいけるか、実行力が問われている。

(塾生 渡邊謙太)

「東日本大震災での津波被害—実態と今後の対応」

東北大学災害科学国際研究所所長・今村文彦氏に聞く

東日本大震災による死者・行方不明者は2万人近くに及ぶ。そのほとんどは巨大津波による犠牲者だった。津波はすぐには到達しなかったために一度避難しながら、自宅に戻って犠牲になった人も多かった。数々の悲劇は主に津波によってもたらされた。3月例会は震災10年を迎えた3月25日に津波工学、津波防災が専門の今村文彦さんを迎えた。

「事前の備え以上のことはできない」

今村さんは大震災の前から津波防災の研究に関わっていた。津波により多くの犠牲者を出してしまったことに無念さと非力さを噛みしめながら、現在

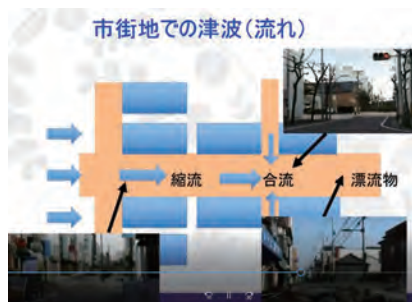


東日本大震災の巨大津波のシミュレーション

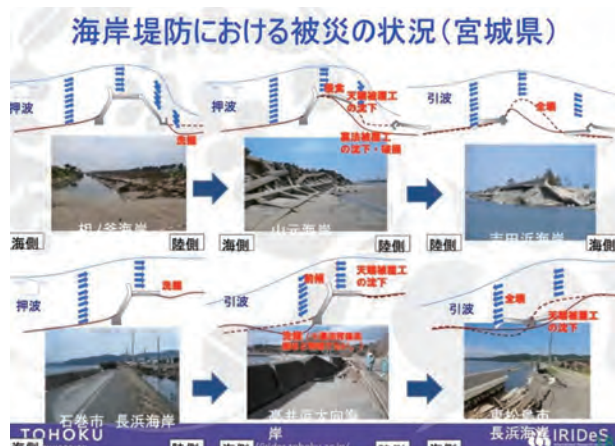
には自然科学だけでなく、避難行動の心理などが関わる人文科学も含めた分野横断的な「災害科学」を追求している。

「大震災の大きな教訓は、我々は備え以上のことはできないということです」。

大学がある仙台市からZOOMを通じてこう語り始めた。「事前防災は確実に被害を軽減するが、やはりゼロにはできない」「危機管理と対



市街地に流れ込んで起きる「縮流」の模式図



海岸堤防の被災状況

応計画は最悪のシナリオに基づいている必要がある」。将来、再び起こり得る大災害に備えてレジリエントな社会を構築する必要があると強調



今村文彦さん

した。そして改めて「あの時」を振り返った。

10年前の3月11日午後2時46分。宮城県沖の南北500キロ、東西200キロという広い範囲で、世界の記録史上4番目の規模の巨大地震が発生した。揺れの3分後に気象庁から最初の津波情報が出た後、20分後に沿岸部に津波が到達。引き波や押し波があって1時間～2時間後までに巨大津波が沿岸部を襲った。

「被害の多くは都市型だった」と今村さん。市街地に侵入してきた津波が建物と建物の間で「縮流」という強い流れになって多くの建物や車がのみ込まれた。市街地では渋滞しがちな車による避難のあり方を、地域ごとに検討する必要があるという。

「教訓が、いのちを救う」

今村さんによると、多数の犠牲者を出した10年前の悲劇から、多くの防災上の教訓は生まれた。防潮堤を乗り越えた津波は、堤の山側の基礎部分を壊して一気に崩壊させたことを教訓に、新しい防潮堤は山側も強く補強されている。これは一例だが「教訓は教訓としてやはり被災地に来て被災者の方々から経験や教訓を直接聞いてほしい」と訴える。

「教訓はしっかり後世に伝えられなければ『備え』に結びつかない」。今村さんはそんな想いを抱きながら「3.11伝承ロード推進機構」の代表理事も務めている。「伝承ロード」は、災害の教訓を今に伝える遺構や慰霊碑などを結び、そこを訪れてもらう。そして将来再び起こり得る巨大災害に対する防災意識を高めてもらい、合わせて被災地の活性化も目指すというものだ。「伝承ロード」のパワーポイントを示しながら「教訓から学ぶことで救える命があることを多くの人が学んでほしい」。今村さんは「3.11」を「防災教育と伝承の日」にすることを提案しているという。

(理事・副会長 内城喜貴)

福島原発事故から10年 私たちは何をすべきか

早野龍五・東大名誉教授に聞く

東日本大震災から10年にあたり、4月例会は原発事故を主題とした。講演の告知では、タイトルを「『福島』の困難な状況が続く中、これから科学者、科学ジャーナリズムが何をすべきかを考える」としたが、講師の早野龍五さんは「SNSとリアルから見た東電福島原発事故からの10年」と改題して、自らが被災地、被災者とかかわってきた体験を中心に話をした。例会は4月13日、オンラインで開催。伊達市議会の高橋一由議長や伊達市民を含めて114人が参加した。

SNSでの影響力7位

早野さんは「CERN（欧州原子核研究機構）研究所で反物質の研究をし、仁科賞をいただいた」と原子物理学者としての研究生活を振り返るところから話を始めた。

「その後、私の人生に大きな変化が生じた。一つは肺がんになって右肺の切除を受けたこと、もう一つが原発事故。それまでと違って世間と向き合うことになった」

2017年3月の最終講義の写真を示しながら、「こちらの半分の人々は、2011年以来、SNS上で付き合いが生じた人や、福島に通っている中で付き合いが生じたお医者さん、学校の先生、農家の方」と説明した。



ツイッターのフォロワー数が2011年3月に突然、2500から15万に増えた。東北大によるSNSの影響力調査では、1位NHK、3位朝日新聞、7位は早野さんだったという。



黒川真一さん（写真上）早野龍五さん（写真下）

「東大教授で、東京に住んでいることを明かしていたので、私が東京を離れたら避難しなければいけないと思ってツイッターを見ていたという人が大勢いた」というエピソードを明かした。

福島県では最初、給食（に含まれる放射性物質）の測定をした。その後、ホールボディカウンターで内部被ばくの測定をし、その成果を医学論文にまとめた。

伊達市のガラスバッジ問題

早野さんはテーマを伊達市のガラスバッジ問題に代えると、基本的な認識として次のように語った。

「私は伊達市から解析を依頼され、解析した。伊達市と直接、データのやり取りをしたことはない。データは適切なものだという認識でやっている。第一論文、第二論文といわれるが、論文は撤回され、その土台は消滅している」

続いて、あらかじめ発言をお願いしていた黒川真一・高エネルギー加速器研究機構名誉教授が疑問点を列挙した。

主な論点は二つ。

一つは、論文には2014年7月から2015年6月までのデータも使っていることになっているが、伊達市は提供していないという。どうやって入手したのか。もう一つは、データ提供に不同意の人のデータを使って論文を書いていることが不適切であるという指摘について、だった。

早野さんの回答を要約すると「データが手元にないので答えられない」とのことだった。論文は共著で、早野さんは分析を担当。研究計画で、データは伊達市が持っているので、研究者側が個人情報を持つべきではないと考えていたと話した。不同意に関しては「申し訳ないことだけど、私が見ていたデータには同意、不同意を示す欄はなかった」と説明した。

他の参加者からも、その他の論文に関する疑問点の指摘や「撤回したから議論は意味がないというのはおかしいのでは」「科学の営みはどうあるべきか」との発言があった。一部、激しい言葉のやり取りはあったが、議論は深まらなかった。

（会報編集担当）

原発爆発から10年 ～ 放射能惨事はいま ～

東京電力福島第一原子力発電所の原子炉3基が連続的に爆発して10年になる。歴史に残る放射能惨事の今を知るため福島を訪れた。

放出放射能の総量は広島原爆の164個分（Cs比）。デブリ880トン除去しない限り、毎日150トン程の放射能汚染水を生産し続ける。3月22日、超党派の会「原発ゼロ・再エネ100」の議員視察団に同行した。

全員PCR検査を受けJRいわき駅に集合。バスで復興の様子を見ながら大熊町経由でサイトに入った。東電のレクチャーでトリチウム（T）と、廃炉の今を聞いた。海洋投棄の代替技術や、体内に入ったTが遺伝子に結合し、遺伝子を破壊する危険性、廃炉まで300年との新情報などは皆無であった。

午後、国の予算で建てた双葉町の伝承館を視察。螺旋状のスロープを上りながら、事故経過を知る事が出来る。2階のジオラマも見事で、「記録性」には富むが、何が「教訓」なのか全く不明であった。

翌日、一人で飯舘村を訪ね菅野典雄元村長に会った。10年前も、映画「いのち～from Fukushima to

Our Future Generations ～」監督としてご自宅で聞いた。「3年で全員を村に戻す」は、放射能のため実現できず、去年 引退した。一般人の20倍も高い年間積算放射線量20mSv以下ということで、避難解除が進むが、飯舘村の帰還率は、24.3%。村に居住する1492人中、外部からの移転者は、189人。村は、大きく変貌した。（5月1日現在）

今、筆者が最も危惧しているのは、「放射能安全神話」作りである。爆発以降だけでも、5mSvほどで人体影響ありとの科学論文が複数公表されている。JASTJ編「科学を伝える」240頁に記載しておいた。（4.5mSvで、小児がんが1.2倍増など）

総理時代の野田佳彦氏（11年）と、安倍晋三氏（18年）はともに、『福島の再生なくして、日本の再生なし』と語った。未だに故郷に帰れない避難者数は、区域外者も含めると9～10万人との情報もある。被曝者の『心の復興』は、道遠く、『原子力緊急事態宣言』は、今なお発令中なのである。

（理事 林勝彦）

WEB編集長から

いつもJASTJホームページをご覧いただきありがとうございます。以下3月以降にウェブにアップしてきた記事です。

■ 3月例会（3月25日）案内

東北大学の津波工学、地震学の教員として大震災の前から、そしてその後も津波防災、地震防災の大切さを説いてきた今村文彦氏を迎え、10年前に何が起きたか、被災地の壮絶な被害を、データに基に振り返りながら「大震災の教訓」を再確認。そして大震災後の防災・減災のための取り組みを紹介していただき、大震災の経験と教訓を伝承するために何が必要かなどを伺いました。

■ 4月例会（4月13日）案内

3.11の後、福島の悲惨な現地に入り、研究者の立場から若い人らへの偏見や風評被害を防ぐための情報発信を続けた物理学者の早野龍五氏を迎えました。

早野氏らが2016年と2017年に専門誌に発表した論文を巡っては、さまざまな問題が提起され、撤回されるという結果になりました。例会では、この論文をめぐる質疑応答も行いました。10年にわたる早野氏の活動を振り返り、この間に科学者、科学ジャーナリスト、私たちが何をしたか。そしてこれから科学は、私たちは何を

すべきか。この国の未来を見据え、多様な視点から建設的に考える機会となりました。

■【プレスリリース】科学ジャーナリスト賞決まる

科学技術に関する優れた報道や科学技術の啓発活動などを顕彰する「科学ジャーナリスト賞」の選考委員会を開き、2021年度を受賞作品を決定しました。21年度は、応募・推薦作品が新聞6、映像13、書籍47、ウェブ3、企画・展示3の合計74作品。2020年度の73作品と同水準でした。

この中から JASTJ 会員による1次選考で、新聞2、映像3、書籍3、ウェブ2、企画・展示1の合計11作品を選抜した上、選考委員会で審査、受賞作は3作品に決定しました。特に優れた作品に贈る「科学ジャーナリスト大賞」に該当する作品はありませんでした。

■ 2年間お世話になりました

5月18日の総会をもって、JASTJのウェブ運営体制が一新しました。短い期間ではありましたが、これまで支えていただいた皆様にこの場を借りてお礼を申し上げます。今後も賛助会員としてJASTJにはお世話になりますので、引き続きよろしくお願いいたします。

（WEB編集長 湯浅誠）

JASTJ をサポートする 賛助会員・団体一覧

(50音順、2021年6月現在)

 AE 海老名・綾瀬法律事務所 科学技術に強い法律事務所です。 弁護士 中道 徹 (神奈川県弁護士会) AE 海老名・綾瀬法律事務所	 株式会社東芝
 エルゼビア・ジャパン株式会社	 公益社団法人 日本アイソトープ協会 Japan Radioisotope Association 公益社団法人 日本アイソトープ協会
 花王株式会社	 株式会社 日本医工研究所 Japan Medical Engineering Institute 株式会社日本医工研究所
 国立研究開発法人 科学技術振興機構 Japan Science and Technology Agency 国立研究開発法人 科学技術振興機構	 JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE 日本学術振興会 日本学術振興会
 カクタス・コミュニケーションズ株式会社	 株式会社豆蔵ホールディングス
 株式会社構造計画研究所	 理化学研究所 国立研究開発法人理化学研究所
 一般財団法人 新技術振興渡辺記念会	 国立研究開発法人 量子科学技術研究開発機構
 東京理科大学 Tokyo University of Science 東京理科大学	 ロート製薬株式会社

■ 新入会員の自己紹介

● 知野 恵子 (ジャーナリスト)

35年以上にわたって、宇宙開発、科学技術、ICT分野を取材し、解説などの記事を書いてきました。読売新聞で記者、デスク、編集委員を務めました。現在はジャーナリストとして、取材・執筆活動を続けております。

● 中西 秀則 (研究教育支援機構秋田支部)

再エネ、自然エネルギーの高圧送電線と電磁波過敏症について、資料編集と論文編纂に明け暮れています、Dr.(医学)。現在は一般財団法人 研究教育支援機構秋田支部で活動しています。宜しくお願いいたします。

● 上田 岳彦 (鹿児島大学准教授)

鹿児島大学准教授・博士 (工学)。光機能性人工タンパク質の合成研究で博士学位を得て以来、計算化学を中心に、マイクロリアクタ、極限環境微生物の探索、人工臓器スキマホールド、有機分子のコンホメーション多様性の解析等に従事しています。

● 林 愛子 (株式会社サイエンスデザイン)

サイエンスが世界を明るく照らすことを目指して、サイエンスを世に生かすためのデザインと、サイエンスを使ったより良い社会のデザインに、言葉で挑戦しています。

● 三井 誠 (読売新聞)

科学と政治の関係がますます不透明感を増す中、一緒に議論してみたいと思います。

■ 退会

宮澤直美、井出ゆきえ、由井麻衣子、柳田明子、渡辺麻子

■ お知らせ

● JASTJ会員向けメーリングリスト(ML)は3種類あります。

① 公式ML info-jastj@jastj.jp

件名に[JASTJからのお知らせ]が入る。全会員対象。月例会の案内など。JASTJ事務局のみが発信できる。

② 告知ML kokuchi-jastj@jastj.jp

件名に[kokuchi-jastj]が入る。受信を希望する会員のみがメンバーで、メンバーは誰でも②のアドレスに送ることでイベント告知などができる。返信はできない。

③ 広場ML hiroba-jastj@jastj.jp

件名に[hiroba-jastj]が入る。受信を希望する会員のみがメンバーで、メンバーは③のアドレスに送ったり、返信したりすることで自由にやりとりができる。

※ ※ ※

ML利用のルールなどは、<https://jastj.jp/about/service/>に書いてありますのでご一読ください。疑問点などありましたら、事務局(hello@jastj.jp)まで連絡してください。

編集・発行

 **日本科学技術ジャーナリスト会議**
Japanese Association of Science
& Technology Journalists (JASTJ)

会員の BOOKS

新刊紹介

『孤独のアンサンブル コロナ禍に『音楽の力』を信じる』

村松秀著 (中央公論新社・2200円・2021年4月)

コロナ禍で、2020年春、オーケストラはあらゆるコンサートが中止になった。筆者らは各オケのトッププレイヤーたちに依頼し、自宅で奏でた「孤独の音楽」を数珠つなぎにしたNHK番組を制作。夏には孤独の音楽を奏でた13名が集い、リアルなアンサンブルを披露した。シリーズは大きな反響呼んだ。拙著は半年間の取材記である。「自分は社会にとって本当に必要なのか？」という彼らの自問は、コロナ禍が私たちに共通して突き付けた根源的な命題だろう。

(理事 村松秀)

『誰もが住みよい社会にするために、何ができるか、すべきか、考えてみませんか。』

三輪佳子(編・著) 他 (明治大学リバティアカデミー・814円・2021年3月)

日々の健康・災害・町おこし・死刑・難民問題など数多くの世界の課題をとらえ、少しずつでも解決するために、今日、日本の一市民に何ができるのか。同タイトルの講座を企画した阪田蓉子氏(元・明大文学部教授)、受講生の中條恭之氏・田口靖子氏・伊東紀子氏、講師の宮本孝一氏(東京都長寿医療センター)、そして私が執筆。我が身と生活を守りつつ社会課題を考えて悩む方々に、手前味噌ながらお勧めの一冊です。販売は明治大内の三省堂書店か三省堂書店神保町本店。

(理事 三輪佳子)

『中谷宇吉郎 雪の科学館 ガイドブック』

(中谷宇吉郎 雪の科学館・税込500円・2021年3月)

石川県加賀温泉郷に、雪氷の科学を専門とする世界でもユニークな科学館がある。1994年の設立以来、人工雪の作成で知られる中谷宇吉郎の研究と、雪氷の不思議を伝えてきた。本書はその初のガイドブック。宇吉郎の研究の全体像と、科学館が開発した実験やワークショップ、科学を文化にする取り組みなどを多彩なビジュアルと共に小冊子に凝縮した。購入は科学館か通信販売＝電話：0761-75-3323、メールyuki-mus@angel.ocn.ne.jpで。(会員 楠見春美)

編集
後記

▶今号で会報は99号を迎えました。白寿号です。白は清潔とか純粹といったイメージがあり、会報にふさわしい気がします。次号は100号です。200号に載せたい記事やエッセイを募集します。200号は25年後です。詳しい募集要項は会員向けのメールでお伝えします。積極的に投稿してください。(能)

【訂正】3月号6ページのニュースで「一般社団法人アジア・パシフィック・イニシアティブ」としたのは「一般財団法人アジア・パシフィック・イニシアティブ」の誤りでした。お詫びして訂正します。

〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1
日本プレスセンタービル8階848
Email: hello@jastj.jp

会長 室山哲也／事務局長 滝順一
編集長 井上能行／副編集長 柏野裕美